

「利用者の望む生活」の実現を考える

—ワークショップ参加から介護福祉士としての理念を検証する—

Realization of “The Life of Dignity and Autonomy”: From Attending the Workshop Consideration the Philosophy of Certified Care Worker

福永宏子
Hiroko Fukunaga

鹿児島女子短期大学

大島郡与論町において対象者が、在宅で生活を継続する支援活動に本学生活福祉専攻の学生が参加した。鹿児島県アイランドキャンパス事業を活用し、学生と住民が参加した現地ワークショップと、学内において、インタビュー調査とワークショップを実施した。2年間の学修の成果として、介護福祉士の基本理念である「個人としての尊厳の保持」及び「利用者主体を軸とした自立の支援」の検証を利用者理解と専門的態度で行った。その結果、ワークショップの感想などからこの活動を通してこの2つの視点は深化できたといえる結果となった。さらに住民アンケートから、住民は今後も「この活動に継続し参加したい」との結果を得ることができた。

Keywords : dignity, autonomy, training of certified care worker, Community welfare

キーワード : 尊厳, 自立支援, 介護福祉士養成, 地域福祉

1. はじめに

大島郡与論町の身体的障害により、これまでの生活が一変した2人の対象者とその家族及びそれを支援する関係者は、対象者が地域で生活を継続する可能性について模索している。生活が継続できるためには、現状において社会資源や介護福祉人材の不足などの課題がある。筆者はこれまで、与論島での介護の実情や地域での支えあいについて理解を深め、住民自身で「地域における支えあい」に必要な課題や問題点を明らかにし、支援が必要な対象者に対しての支援体制や支えあいの実践が自主的に可能になっていくことを目指す活動を行っている。

鹿児島県アイランドキャンパス事業を活用し、この活動へ本学生活福祉専攻学生の参加を通して学生と与論町住民とともにワークショップを行い地域での生活について検討を行った。これにより、どのような状況でも地域で生活を継続できる権利と可能性があることを意識できることを目的とした。今回は、この活動を通し、参加した学生の2年間の学修成果として介護福祉士の基本姿勢と理念および役割への理解について検証を行う。

2. 背景

(1) 介護福祉士養成課程の介護領域カリキュラムの目的

介護福祉士養成課程は、正式に介護福祉士養成教育が開始されて以降2度の見直しが行われている。その中でも2007(平成19)年の改正は抜本的な見直しであった。社会福祉士法及び介護福祉士法の改正による介護福祉士の定義および義務規定の見直しなどに即したものである。これにより介護福祉士は、単なる「入浴、排せつ、食事その他の介護」から、「専門知識と技術を持って、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護」を業とする者に改められた。教育課程の改訂は、専門領域、教育内容の変更により、介護福祉士養成教育の質の向上を主眼としたものであった。さらに介護福祉士資格を持っている人が身につけるべき能力や資質、役割を表す「求められる介護福祉像」が示された。これにより介護福祉士の専門性が具現化されたことで専門的職種としての役割が明確になったといえる。これからの社会状況の変化や、介護福祉士への意識の変化、制度の改正によりこれまでの介護福祉士は単なるケアの実践者ではなく、生活者としての対象者を支援する専門職種であることが鮮明となった。

その後、「介護人材に求められる機能の明確化とキャリアパスの実現に向けて」(2017(平成29)年、社会保障審議会社会福祉部会福祉人材確保専門委員会)の報告を受けさらに改正が行われ、2018(平成30)年に「介護福祉士養成課程の教

育の見直し」によって、2019年度より介護福祉士の養成校において順次新カリキュラムが実施されている。本学は2021年度入学学生より新カリキュラムの養成教育が実施されている。併せて、「求められる介護福祉像」もさらに整理された。これは、教育を通して、介護福祉士の専門性を具現化していく目標指標となるものである。

介護福祉士養成課程では、対象者理解とこれを取りまく環境理解についてさらに学修を深化させていくことが求められる。対象者は、心身の状況によって社会的不利な状況の人の支援を行う者ではなく、「社会の中で一人の個人として尊重される。自分の自由な選択と決定で人生を決めることができる存在」として支援を行う視点の学修が必要となる。また、地域において対象者を支援するためには、現在の社会のしくみおよび制度や施策の理解をすることで、多様な生活の場とサービスへの対応力と実践力の学修が必要となると考えられる。

「介護」の教育領域では、図1に示された目的を6科目で学修する。この中の筆者主たる担当科目である「介護の基本」、「介護過程」、「介護実習」では介護福祉士の専門的役割を發揮できるための知識・技術の学修を行っている。他の教育領域「人間と社会」、「こころとからだのしくみ」を理解し十分に専門的に發揮するためにもこの「介護」の領域の果たす役割は大きいと考える。特に、「個人の尊厳の保持」、「利用者主体の自立を軸にそれを支援し支える」の介護福祉の基本理念を基に行

補綴	目的	教育内容	ねらい
介 護	1. 介護福祉士に求められる役割と機能を理解し、専門職としての態度を養う。 2. 介護を実践する対象、場によらず、様々な場面に必要とされる介護の基礎的な知識・技術を習得する。 3. 本人、家族等との関係性の構築やチームケアを実践するための、コミュニケーションの基礎的な知識・技術を習得する。 4. 対象となる人の能力を引き出し、本人主体の生活を地域で継続するための介護過程を展開できる能力を養う。 5. 介護実践における安全を管理するための基礎的な知識・技術を習得する。 6. 各領域で学んだ知識と技術を統合し、介護実践に必要な観察力・判断力及び思考力を養う。	介護の基本	介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力と態度を養う学習とする。
		コミュニケーション技術	対象者との支援関係の構築やチームケアを実践するためのコミュニケーションの意義や技法を学び、介護実践に必要なコミュニケーション能力を養う学習とする。
		生活支援技術	尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする。
		介護過程	本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする。
		介護総合演習	介護実践に必要な知識と技術の統合を行うとともに、介護観を形成し、専門職としての態度を養う学習とする。
		介護実習	(1)地域における様々な場において、対象者の生活を理解し、本人や家族とのコミュニケーションや生活支援を行う基礎的な能力を習得する学習とする。 (2)本人の望む生活の実現に向けて、多職種との協働の中で、介護過程を実践する能力を養う学習とする。

図1 新教育カリキュラムの手引き(介護領域抜粋)

動できる態度を養う。知識や技術を統合して対象者を生活の観点から捉え、望む生活の実現に向けた思考過程を醸成する。これらは、介護福祉士養成の上でも大きな核となる部分である。

(2) 大島郡与論町の福祉サービスの現状

与論町は鹿児島県の最南端に位置し、周囲を海で囲まれている。1島1町の行政区である。鹿児島県本土よりも沖縄県の方が近く、生活圏も沖縄県である。令和3年10月末現在人口は5,139人(与論町ホームページ)である。そのうち65歳以上の高齢者は1,769人である。令和元年10月現在で介護保険の要介護認定者は、295人、要支援者は15人となっている。(WAM NET) また、障害者手帳の交付は382人(令和3年2月現在)となっている。与論町内において、高齢者および障害者の利用できるサービスは、図2の通りである。介護保険サービスおよび、障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律(障害者総合支援法)で利用できる人数に対して、サービス事業所(サービス数)が少ないことは明らかである。2021年10月現在、2017年の介護保険法改正により開始された共生型サービスに対応できる事業所はない。障害者サービスは圧倒的に少ないといえる。しかし、2021年11月に、障害者総合支援法による居宅介護事業所および重度訪問介護事業所が新たに開設した。

介護保険サービス			障害者サービス		
施設系	介護老人福祉施設	1	介護給付	重度訪問介護	1
	介護老人保健施設	1		生活介護	1
居宅系	訪問介護	1	訓練等給付	就労継続型支援	1
	訪問入浴	1		共同生活援助	1
	通所介護	1	医療機関	病院	1
	通所リハビリテーション	1		クリニック(歯科含)	3
地域密着型	認知症対応型共同生活介護	1			

図2 与論町内の福祉サービス

医療機関は、1病院、1クリニック、2歯科である。島内で診療や治療ができず、島外の病院へ行くこともある。訪問看護ステーションや訪問診療などはなく、病院やクリニックからの往診などで対応している。

与論町で生活する障害者は、障害の程度によって、十分な医療支援や教育が受けられない場合は、島を離れることが多い現状にあった。筆者は、進行難病患者団体が在宅療養者の支援を行う中で、2018年に与論町在住で進行性難病を発症した方が、これまで通り自宅で生活を続けるための介護人材育成の支援を行っている。これまで、大きな問題なく生活してきた。しかし、病気により生活行為すべてに介護が必要な状態となってしまった。それにより本人、家族の生活はこれま

では全く違うものとなった。病気と共にこれまで通り家で生活を続けるためには、解決しなければいけない多くの課題があった。2020年に在宅で様々な介護などの支援を受けながら生活を開始ができた。その後も同様な対象者が生活を開始することができるようになってきた。

このような状況から、与論町内での福祉サービスに関しての課題を解決していくためには、与論島内での多職種が連携をすることが重要であるとの意見が多く寄せられるようになった。これまで、生活問題や個人の問題に対し、顕在化した内容に対応することが主であった。小さな町であるため個別的な連絡や相談などの連携は概ね円滑にできていると考えている。しかし、潜在的な問題に対して共通認識を持ち地域の中で解決するしくみはない。さらにそれを、専門職種が解決できる能力をつける必要がある。特に、先述した対象者に携わった福祉関係者は、地域で生活するためには今ある資源をいかに有効活用かを多職種で考え、連携することが、与論町で生活する住民の福祉の充実につながると考えている。今回は、学生に対しての検証であるため概略に止めおく。

3. ワークショップの実施

3-1 実施の概要

鹿児島県が実施する、アイランドキャンパス事業を活用し、本学生生活福祉専攻2年学生が、学修の成果を確認する目的で、大島郡与論町をフィールドとしてワークショップを実施した。これまでの授業の中で、対象者を取り巻く環境によって、望む生活の実現の難しさや、尊厳の保持などで活用していたからである。授業の様子から、学生が興味を示していたこともある。

当初、与論町内での活動を2泊3日で実施する予定であったが、鹿児島県発報のCOV-19感染拡大警報時期であったため、学内活動と現地活動へ内容の変更を行った。学内で行った活動を代表の学生が与論町で報告し、さらにワークショップを実施する方法を取ることにした。

3-1-1 実施時期および参加者

令和3年2月9日（火曜日）～10日（水曜日）於：短大と与論町とオンラインつなぎ実施する。

鹿児島女子短期大学教員および学生、与論町在住の対象者および介護支援関係者

令和3年2月22日（月曜日）～24日（水曜日）於：与論町

鹿児島女子短期大学教員および学生、与論町在住の対象者および介護支援関係者

3-1-2 実施の方法

(1) インタビュー調査

〈目的〉

- ①現在の生活を通して、当事者の思いやそれを支える家族から直接話をきくことができる
- ②実際に話を聞く、その場の雰囲気からも当事者・関係者の思いを推察することができる
- ③多角的な視点で考えることで、地域の課題を地域資源にかえ、そこから持続可能な地域づくりを考えるきっかけづくりをする。

〈対象〉

- ①自宅で、介護を受けながら生活をしている対象者とその家族 2組
- ②①の対象者の介護支援専門員（以下相談員）及び相談支援員（以下相談員） 各1名

〈所用時間〉

30分～45分程度

〈実際の流れ〉

インタビューガイドにそって実施する。必要に応じて質問を追加する。会話でのコミュニケーションではなく、筆談、口文字、コミュニケーション機器を使用する場合がある。対象者のペースで進めることを心掛ける。今の状態の受容過程や思い出すことによって、感情が揺らぐことがあることを想定して、初対面であっても話を始めやすい環境を作ることに努める。

(2) 学内ワークショップ

〈目的〉

- ①これまでの学修の成果として、その人らしく、地域で生活するためにどのようなことができるかを考え、地域や関係者を共有することができる

- ②地域に関係がなくても、その人のことを一生懸命考えることで、新しい発見やつながりをとらえることで、地域に還元できる。
- ③多角的な視点で考えることで、地域の課題を地域資源にかえ、そこから持続可能な地域づくりを考えるきっかけづくりをする。

〈方法〉

導入 趣旨説明 話題 (テーマの提供)

地域で生活を続けるために、事例やインタビューを通して、現在の課題を考える。どうしてその課題は生まれたのかを考えてみる。事前に配布した資料の経過をたどり生活をされている対象者と同じような環境で生活をしている対象者の方2名にインタビューを行う。

グループワーク1 「現在の課題を考える」

「その人の望む生活」を送るうえでの課題を最低5つ以上付箋に書き出す。グループ内で共有しながら分類する。分類したものにそれぞれ「タイトル」をつけ、最重要度順にランキングをつける

グループワーク2 「課題マップづくり」

ランキング1位の課題を青色模造紙の中心に書きその周りを囲む。なぜ、その課題が生れたかを考えて、原因として考えられることをそれぞれ書き込んでいく。その書き込んだものから、つながりのある要因や事項を、外側に広げて自由に書き込んでいく。つながりや関係性のあるものに線や矢印(⇔)、関係性の強弱をつける。

全体ワーク1 「課題マップの共有」

他のグループの白、青の模造紙、疑問に思う事や同感することがあれば、それをコメントや!・?等の記号を使って、他のグループのマップに直接書き込んでいく。書き込まれたコメントをグループ確認する。

グループワーク3 「インタビューのまとめ」と再検討

他のグループからのコメントからさらにグループ内で要因や事項を検討する。インタビューの内容についてまとめ、印象についてまとめる。

グループワーク4 「地域づくりマップづくり」

ピンクの模造紙1枚に使用する。これまでのワークの中で、自分たちが実現したいことを1つ決める。実現できたら、どのような好循環が地域で作られるか、そしてどのようなゴールが待っているか図で表す。もう1枚の模造紙を使用し、実現できるイメージができたなら、まず、どのような方法や手段があるか、どのように進めていくかを考える。

全体ワーク2 「地域づくりマップづくり」の共有

各グループでピンクの模造紙「地域づくりマップ」の発表を行う。与論島とオンラインで意見交換を行い、全員で共有する。全員で、感想や意見交換を行い、気づきを共有する。感想でもよい。

(3) 現地でのワークショップ

導入 *趣旨説明 話題 (テーマの提供)

地域で生活を続けるために、事例やインタビューを通して、現在課題を考える。どうして、その課題は生まれたのかを考える。学内ワークショップの報告を行う。インタビューでの結果、ワークショップで考えた内容について説明を行う。

個人ワーク * 「取り組みマップの共有」

実際の「取り組みマップ」をみながら、「疑問に思う事」、「現在ある社会資源」、「活用方法」、「よいと思う事」について付箋に書きこみ貼る。◎や!・?の記号でもよい。

全体ワーク1 *優先順位の決定

参加者のコメント等を参考にしながら、一番重要であると考えた内容に1つ「花シール」を貼る。その中から、多かった内容の3つを決める

グループワーク * 「未来マップづくり」

自分たちが実現したいことを1つ決める。その実現したい事にタイトルを決め、真ん中に書き込む。どのような方法や手段があるか、どのように進めていくかを考える

全体ワーク2 * 「未来マップ」の共有

各グループの模造紙「未来マップ」の発表を行う。全員で、感想や意見交換を行い、気づきを共有する。感想でもよい

3-2 実施の様子

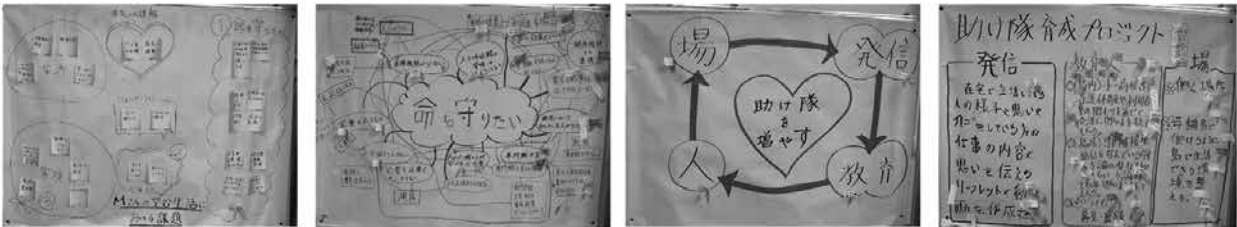
(1) インタビュー

各グループは、それぞれ別の対象者と相談員の2名の合計4名にインタビューを行った。モニターで実際の生活をしている雰囲気を確認しながら進めた。対象者へのインタビューは、相談員、介護者および家族が同席し、インタビューに対しての補足や仲介などの支援を行った。会話でのコミュニケーションが難しい対象者のため、ヘルパー、家族が仲介をする場面等が見られた。対象者の一人は、相談員から歌が好きと聞いていたので、『ふるさと』を合唱した。途中から対象者も一緒に口ずさむ様子があった。その様子をみた家族が涙ぐまれていた。

(2) 学内ワークショップ

2つのグループに分かれ、進行表にそって討議を進めていった。最重要課題は「期待」と「命を守りたい」となった。さらに、解決方法について検討を重ねた。途中の全体ワークから得られた他グループの意見も参考にしながら、さらに「地域づくりマップ」の作成した。(図3)

A グループ作成マップ



B グループ作成マップ



図3 学内ワークショップ

(3) 現地ワークショップ

住民13名と学生2名が3Gに分かれて行った。学生から学内ワークショップでの結果について報告発表を行った。その後、それぞれが報告された模造紙へコメントを貼っていった。その後、住民視点で「未来マップ」の作成を行った。テーマが、「ユイタバー」、「ピチュドッ宝」、「ゆかアゲンチャー」(図4)自分たちの言葉で表現されたものになった。具体的な意見交換は、時間が足りなくなる程、各グループ積極的に行っていた。

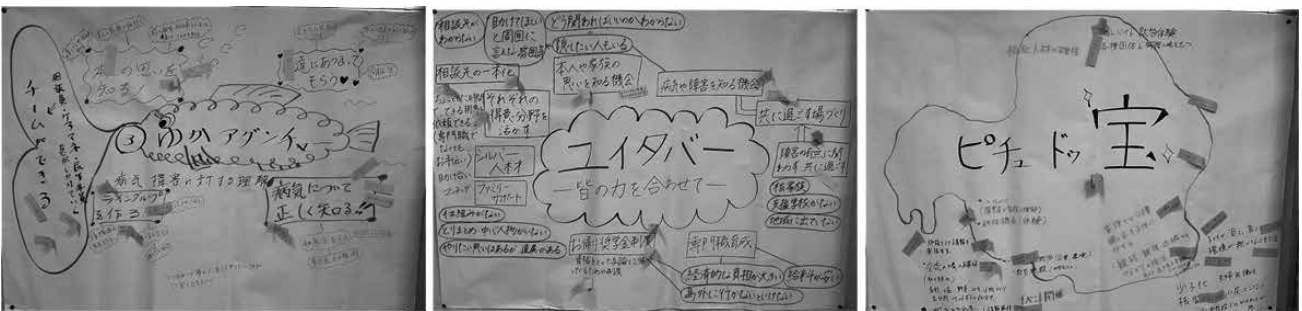


図4 現地ワークショップ

4. 結果

令和3年2月9日(火曜日)～10日(水曜日)と、令和3年2月22日(月曜日)～24日(水曜日)の延べ5日間で実施を行った。今回のワークショップには、延べ39名の参加となった。また、学生の感想から、それぞれの活動に対して自由

記述には次のようなことが記載されていた。

(1) インタビュー

インタビューガイドにそって進めることが出来た。オンラインということもあり、会話のタイミングが合わない事もあったが、家族にも質問を行うなど、積極的に進めることが出来た。

①対象者およびその家族、支援者の様子

「終始笑顔であり、ヘルパーさんも大変だと思うがにこやかに話しをしてくれた。」、「提示されていた事例を読んだ印象から想像と違って元気な方であった」、「家族が時々言葉に詰まる様子は、性格はそのまま表れていたような気がする」(2名)、「家族への質問の時対象者がニコニコしながら聞いていた様子を見て、家族関係も良好なのだろうと感じた」、「表情を確認しながら質問もできたので、双方のやり取りをワクワクしながら聞いていた。」、「寄り添ってコミュニケーションを取っている様子を感じた。」、「福祉の現場での問題点が具体的にわかった。やはり人の想いは直接聞いてみないと分からないのだということを改めて感じた」、「話を聞いた今も、そのすべてを理解することは難しいと思った。」

②印象に残っていること

「お互いが支えあって一生懸命に生きているのだと感じた。」、「病気にあるなしに関係なく、与論島に住んでいる人全員が住みやすい与論島になってほしい」と言っていたことは、『住みやすい与論』にするには、サービスの体制を充実することも含め働き手や費用の確保も課題であると感じた。

「『つらくて頑張っているのは本人だけど、介護する家族も病気を向き合い、家族が体調を崩したり、ストレスをためないよう体調管理を行って介護する事が大切』という家族の言葉を聞いて感動した」、「ケアマネージャーからの歌が好きな情報で、実現したことは、対象者への深い理解と思えばこそその発言であり、素晴らしいと思った」、「一人で相談支援を行う大変さや与論、対象者のために様々な事に挑戦し、勉強している姿に感銘を受けた」

③インタビューを体験して

「インタビューがいつもと同じ場所からのやり取りだったので、ストレスもなくあまり緊張もしないで本音で発言しやすい雰囲気だったと感じた」、「指文字での返事を画面から確認できたので良かった。嬉しかった」(2名)

(2) 学内ワークショップ

①地域の特性や地域づくりに関連したこと

「市内に住んでいたなら、それほど考えなかっただろう福祉環境について考えることは、とても重要な事であると感じた」、「島ならではの近隣住民の助け合いの精神が多くあると思うのでそこを活かし、家族やサービスでは補えない部分もチカラとなり、支えていくことが今、不足しているものにも変わるものではないか。と感じた」、「『自分のこととして考えてほしい』とインタビューでの発言から、強い意志を持ったリーダーシップのある方のもと、島全体で様々な仕掛けを行っていかねばならない将来が待っていそうだと考えた。」、「『勉強できる場所が少ない』などから学ぶ機会をつくる。や、『理解者が少ない』から交流の場を作るなど、テーマが異なっても似たような解決策も出されていた」

②対象者支援に関連したこと

「まず一番に考えたのが、対象者の命を守ること、その命を守るために周囲の環境やサポートを充実させ、その思いを“助け隊”というような形にすることだと考える」、「『その人の望む生活』での課題を分類し、その後ランキングをつけて一番重要な事を決めることにすべてが大事だと思っていたので、一番悩んだ」、「『期待する事』について広げていった。その時に本人の不安の軽減や、家族の負担軽減に繋がる必要な事を考えた」

③学内ワークショップを経験して

「対象者がより良い生活をしていく為にできることはないかを考えるようになった。このような活動が大切だということを感じた」、「重要課題が決まったら、必要な事、問題、解決の方法や手段を考えることはワクワクしながらできた」、「段階的に行うことで、課題を明確にできる方法だと思った」、「関係のある人や施設を記入して線で結ぶことで、人はたくさんの人と関わりを持ちながら生活していることを改めて感じた」、「自分一人だけの考えでは、考えつかない事や意見を深めることは、意見やインタビュー、これまでの学習した学びを取り入れることが出来た」、「情報収集や学んできたことを形にすることは楽しかった」、「意見を出し合いながら作り上げていくことが実感できた」、「建設的な考え方や話し合いができそれを形にできたと思う」、「付箋になんでも書いてよかったので、意欲をかき立てられた」、「書いた課題を共有しながら優先順位を確認する作業がとてもやりやすかった」

(3) 現地ワークショップ

①参加学生の感想

「学内ワークショップで考えたことが、現地ワークショップに参加して思っていたことと違うことが多かった。また、考えてみなかったことも知ることが出来た」、「私たちのように外からではなく、内側から感じている課題について知ることが出来た」、「学内ワークショップでの成果物に評価や賛成されたことも多くてよかった」、「テーマが、与論の方言であったのでとても面白く、興味を持ちやすいと感じた」、「実際に困ったことや、不安なこと、楽しみを実際に教えてもらうことが出来た」、「与論の福祉従事者の方々と住民の方がよくしたいという熱い想いを持たれていると感じた」、「『人（人とのつながり、人材）、教育、病気・障害』に関心が集中していることが分かった」、「SNSの活用など、人の結びつきの強さは、良い意味で素晴らしい共生社会の実現を感じた」、「人との繋がりが希薄になっている現代で、与論の人々のように繋がりを大切に、思い合っていくことができる基盤を作ることは難しい。しかし、だからこそ、与論だからこそ、それが実現し得る可能性があると感じた。他にはない強みであると考えてる」

②現地ワークショップ参加者アンケート

当日ワークショップについてのアンケートを実施し、参加者13名全員からの回答があった。

問1.「ワークショップはどうだったか」

「とても良い」11名、「よい」2名

自由記述の内容

「楽しかった」との感想が一番多かった。「一緒に考える機会ができ、改めて与論について考えたい」、「みんなで作り上げていく過程が良かった」、「いろいろな意見を聞くことができてよかった」、「様々な問題意識を共有できた」、「わかりやすかった」、「実現に向けて行動できれば良い」

問2.「一番印象に残っているところ」についての自由記述

「一人では難しくても、力を合わせればできることを再確認した。」、「まずは、ともに過ごす場づくりから」、「与論への思いは一つ」、「意見はあるが、だれが中心になって活動を勧めるか?」、「今何ができるのか考えさせられた」、「できることは助け合う、自然な形で出来たらいいな」

問3.「同じような企画があれば参加したいか」

全員が「したい」と回答した。

自由記述の内容

「機関や立場を超えて一緒に考えていきたい」、「学生の発表から深く掘り下げた勉強会を開催してほしい」、「何回も実施して具体化していければ」、「個人情報の保護と情報開示を増やすなども実現に向けての課題になる」、「学生の頑張りを見て、自分も元気ももらった」

(4) 学生レポート「介護福祉の勉強と今回の経験をしてみ、介護福祉の立場から対象者の望む生活に必要なと思うこと」

①介護福祉士の立場から考えたこと

「対象者の心身の状態に合わせて、対象者が過ごしやすいするための工夫を考える。そして、より良いケアになるように変え、実践していくことが必要である

と考える」、「対象者の生活を実際に見て、声や会話での訴えが難しい場合、定期的に確認することも必要であるが、対象者の負担を考えて快適な生活望むための意思疎通ができる工夫（文字盤に必要な内容を書いておく）をすることで、対象者の望む生活につながると考える。」、「どのような方がどのような生活をどのように過ごしているかを知ることが大切だと感じた。知る事ができないと、何に困っていて、何を必要としていて、何をどのように支援しなければいけないかということに対して考え、課題を見出し、その課題に対しての手立てや支援の介入ができないと考えた。」、「対象者が病気や障害を抱えながらも今後の人生をどのように過ごしていきたいかという望みや思いを知ることは、その状況や思いをできるだけ知る、理解することで必要な支援につなげる事が大切だと感じた。」、「「意志の疎通がうまくできない」と言って、『今までこれできてきたから』と同じ介護を続けるのは、対象者本位でなく、介護者の自己満足の介護になってしまう。」

<p>②望む生活に必要なこと</p> <p>「対象者の望みや思いを知る。それからその状況を理解し、必要な支援につなげること」、「家族の支えや友人、介護者も必要だと思う。そして、関わる方が負担にならないように支援を続けられる環境を整えること大切だと考える。」、「対象者の望む生活に必要なことは、その人に合わせて、対象者の視点や思いに共感できる信頼関係のできた介護者が関わっていけば、ストレスを感じることもなく地域で生活することが可能となると考える」、「まずは、環境だと思った。対象者の望む生活に必要なことは、心の支えになるものだと思います。これからも住み続けたいと思うような環境が対象者に精神的な安定をもたらす、QOL (Quality of life : 生活の質) の向上にもなるのではないか」</p>
<p>③地域での生活をすることについての考え</p> <p>「『病気のあるなしに関係なく、与論島に住んでいる人全員が住みやすい与論島になってほしい』の言葉に、島民が安心して安全に生活できる環境を整えていくことが大切なのだと感じた」、「現状を知ることは、すべての人が同じ社会で共に生活するために必要な第1歩だと思った」、「受けるサービスを選択することができず、施設側が対象者を選択している状況には1番驚いた。人材不足やハード面での不足している部分を補うことが必要だと感じた」、「与論だからこそ、つながりを大切に、思いあっていくことが実現し得る可能性があると感じた。他にはない強みであると考えている」、「社会資源が不足していても、それぞれが工夫することで、快適な生活のための意思疎通を図ることができるのではないか」、「利用できるサービスが少ないので、介護する家族の負担が多くなると感じたが、与論町役場で携帯電話を落としたときにすぐに対応してもらった。このことから困ったことがあったらすぐに対応できることもあり、与論町民にとって安心して生活ができると感じた」</p>

5. 考察

5-1 各取り組みから考察

各取り組みの結果から、フィールドを通して介護福祉士の必要な視点の教育への効果について考察する。

①インタビューについて

インタビューでは、双方にとって初めての経験で不安が大きかった。しかし、実際始めてみると遠隔ではあるもののコミュニケーションをとり和やかな雰囲気での終了した。当事者や支える家族から直接話を聞くことができた。言語だけでなく、指文字や意思疎通が難しい方とのコミュニケーション手段を実際に観る体験は、「対象者のペースに合わせていった対象者主体」という、当事者の負担や対象者の思いを知るための基本姿勢の理解へつながったと考える。さらに、当事者の家族の実際の様子や話を聞くことで生活を継続するために必要な環境、雰囲気及び関係性の理解を「家族関係も良好だろう」、「寄り添っている」など推察することが出来た。授業では、家族の思いを聞くことができる場面が限りなくない。アンケートの内容に家族の思いや関係性についての感想も多いことから、対象者を含めた家族の支援の必要性が理解できたと考える。しかし、これに至るまでの葛藤や不安などの理解までには至らなかった。

また、相談員に対してのインタビューでは、対象者の相談や調整役の相談員の業務内容および専門職としての思いを聞くことができた。「福祉の現場での問題点が具体的にわかった」や仕事に対しての姿勢を体感できた学生が多かった。このことは、多職種連携の必要性や役割の理解につながったと考える。相談員からのアドバイスで、歌を歌った体験からも、関係する専門職も介護福祉士と同様に対象者主体で支援する理解ができたのではないだろうか。これらは、「尊厳と自立支援の理念の理解」および「多職種協働、連携」、「当事者と家族等との関係性の構築」、「チームケアの実践」の理解が深化したといえる。

②学内ワークショップ

学内での活動に当初は不安もあったが、与論町に関連する情報（広報誌、要覧、観光ガイドマップ）などを掲示し与論島内のマップをつくることから始めたことで、学生に対する意識付けになったと考える。

グループで成し遂げるチームとしての活動で、自分の意見を持ち、伝え、議論し、修正して完成した成果物を通して、チームケアの実践と協働を理解できたと考える。また、多角的な視点から物事を観ることは、対象者の理解に必要な要素である。興味を持って取り組むことが出来たことは、様々な意見や視点の強化につながったと考える。これが「課題をみつけるためのプロセスの重要性」、「対象者主体の考え方」、「対象者を取巻く環境の理解」となったと考える。これらは、介護福祉士としての役割や広い視野、社会生活や地域も視野に入れた介護実践の課題解決の思考へつながったと考える。

③現地ワークショップ

与論町での活動は、2名の学生と参加したが、これまでの成果を発表したうえで、一緒に考えるワークショップを行った。付箋紙に意見を書いたことで、様々な意見が出た。自分たちの「未来マップ」を作る場面では、テーマをすべてのグ

ループが「人（人材・育成）」にあげ、「つながり」を意味する方言にしたことが印象的であった。仕上げることも大切であったが、学生も交え様々な意見を出し合っている様子をみて、住民、学生双方、なんらかのきっかけづくりの提供になったと考える。最後に、参加者から、「定期的集まって、活動を続けていくことの必要性がある」と発言があり、今後も継続して活動を行う必要性が明らかとなった。

実際に現地でのワークショップに参加した学生は、学内ワークショップとの相違と与論町の住民の思いを知ることが出来たことで、与論町内の強みを改めて認識したことおよび実際に当事者の話を聞くことの重要性を理解することが出来た。今回は、COV-19感染拡大で日程の変更を余儀なくされたため全員の参加が難しかった。住民からは高い評価を得ることができた。学生が考えた内容に理解を示しさらに、島外から見た与論町の福祉の状況を知ることが出来たことには大きな意味を持つと考える。これは、同じような取組みに参加したいと回答した参加者が全員いたことから明らかである。対象者を地域で支えていく観点、地域社会における生活とその支援、チームケアなど介護福祉士としての役割理解へつながったと考える。

④学生レポート「介護福祉の勉強と今回の経験をしてみても、介護福祉の立場から対象者の望む生活に必要なと思うこと」

介護福祉士には、「その担当する者が個人の尊厳を保持し、自立した日常生活を営むことができるよう、常にその者の立場に立って、誠実にその業務を行わなければならない」誠実義務がある。この個人の尊厳を保持し、自立した日常生活を営むためには、介護福祉士は支援を行うために対象者理解を行うこと求められる。この個人の尊厳は、「社会の中で個人の幸せにとって大切な考え、個人として尊重される。」と理解し、具体的には、「その人の望む生活の実現」と表現し、自己選択、自己決定ができるような対象者理解の指導を行っている。自己選択、自己決定をするには、まず対象者の思いを知ることから始まる。そのためには、初めに信頼関係の構築が必要とされる。「望みや思いを知る」、「知る理解することで必要な支援につなげる」、「状況を理解する」、「対象者の視点や思いに共感できる信頼関係」などの学生の感想から「その人の望む生活の実現」に対して必要なことは理解できたと判断すると、介護福祉士としての必要な知識と技術は身についたといえる。

5-2 総合考察

介護福祉士は、個人の尊厳の保持、対象者主体の自立を軸にそれを支援し支えることを理念としている。つまり介護福祉士は、施設・地域にかかわらず、一人の人間としての価値を尊重する視点を基本理念とする。対象者個人が人生をどのように過ごしていくかを選択し決定できるように支援し、生活の安定および継続を可能にするために必要な支援を考え実施するが求められる。学生が歌を歌った場面を、来島した際に、「病気になり歌なんて歌ったことがなかったけど、まだ歌うことが出来るのだ。と涙を流し感謝している」と感想を直接学生が聞いた。学生にとっても住民にとっても、「いつも」とは少し違った時間を住み慣れた場所で体験できたことは非常に有効な事ではなかったかと考える。つまり、介護福祉士は、支援のために変化を考えるのではなく、いつもの慣れた中にある安心して生活できる環境づくりを行う。その上で対象者の生活に工夫を加えることで、生活の充実を感じる事が役割であるといえる。今回の取組を通して、尊厳の保持に対する「対象者個人のみを覗くのではなく、対象者を取り巻く環境も含めて対象者である」の理解は深化したといえる。学内ワークショップで、最重要課題が対象者主体のテーマとなったことや対象者に対しての可能性を示す提案ができた。最後のアンケートからも対象者理解の重要性の記述が多かった。さらに家族や介護者の役割についての記述も多かったことは対象者を支援する時の心構えや家族への配慮の必要性に気づくことが出来たといえ、2年間の学修が、この活動への参加を通して成果物として出てきたと考える。

学生にとって、介護福祉士養成の集大成として今回の取組は、これからの介護福祉士としての役割の理解と専門職種として態度の定着を確認する場面となったことは明らかである。

6. 今後の課題

今回は、時間を確保し集中して、課題解決に向けたワークショップを実践できた。これには学生にとってもよい経験であったといえる。今後も総合的な知識と技術が定着できた介護福祉士の人材育成を行う必要がある。養成カリキュラム内外にかかわらず今回のような場を作っていく必要がある。一度限りでなく、今後も継続して実施していきたい

引用・参考文献

1) 静岡県立大学「ふじのくに」みらい共有センター「地域の課題解決を目指したワークショップ～つながりが地域課題を解きほぐす～」

2016.3.24

- 2) 公益法人 日本介護福祉士養成施設協会「介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き」2019.3
- 3) 介護福祉士養成講座編集委員会「最新介護福祉士養成講座3～10」2019.3.31
- 4) WANNET 要介護（要支援）認定者数 2021.11.23 (<https://www.wam.go.jp/wamappl/00youkaigo.nsf/aAuthorizedDetail?openagent&NM=46&DATE=2019%252F10>)
- 5) 与論町ホームページ 2021.11.23 <https://www.yoron.jp/>

(2021年11月24日 受領／2021年12月9日 受理)